相談援助実習が学生の共感性（Dispositional Empathy）に与える影響について

○東洋大学　　佐藤　亜樹（002622）

共感性、ソーシャルワーク教育、相談援助実習

１．研 究 目 的

目的：この発表では、社会福祉士受験資格取得のための指定科目である相談援助実習が学生の共感性 （dispositional empathy）にどのような影響を与えるのかについて、四国の大学生を対象とした探索的な予備的調査の結果が報告される。
背景：効果的なソーシャルワーク実践のためには、援助者が十分な共感性を持つことが求められる（Gerdes & Segal, 2011）。困難を抱える人々を援助するソーシャルワーク専門職にとって、目の前にいるクライエントの立場を理解し共感的態度で関わることは、援助される側の抵抗を軽減し、問題解決のための情報の開示を促す（Forrester, Kershaw, Moss, & Hughes, 2008; Forester, McCambridge, Waissbein, & Rollnick, 2008）。わが国では、対人援助職に就くことを希望する学生群と一般企業志望の学生群の共感性を比較した研究（蕨岡, 2007）はあるが、ソーシャルワーク教育（相談援助実習）が学生の共感性にどのような影響を与えるのかについての実証研究（佐藤, 2016, 2017）は二例しか存在しない。

２．研究の視点および方法

調査疑問・仮説：「ソーシャルワーク教育は、学生の共感性に影響を与える（高める）」という仮説が検証された。
調査対象：調査標本は、四国の大学に在籍する 32 人の学部生（2015-2017 年度次の 3 年生）であり、女性が 25 人（78.1%）、男性は 7 人（21.9%）、平均年齢は 21.0 歳であった。実習配属先は、病院（3 人: 9.4%）、社会福祉協議会（3 人: 9.4%）救護施設（1 人: 3.1%）、児童福祉施設・機関（6 人: 18.8%）、高齢者施設（8 人: 25.0%）、障害者支援施設（11 人: 34.4%）であった。
調査手順：被験者には、実習開始直前、実習終了直後、実習終了 1 か月後のフォローアップ時に無記名回答の質問紙を配布した。
測定用具：共感性を測る尺度：共感性の測定尺度として28項目からなるDavis （1983）の 「対人的反応性指標 [Interpersonal Reactivity Index （IRI）] を採用し、7点リッカート法にて回答を求めた。この尺度は、共感性の情動的及び認知的側面を多元的に測定するために開発されたものであり、「空想 （Fantasy）」、「共感的懸念 （Empathic Concern）」、「個人的苦悩 （Personal Distress）」、「視点取得 （Perspective Taking）」の四つの下位尺度から成り立っている。本研究では、日本語版に翻訳されたIRI （桜井, 1988）を若干の修正を加えて使用した。尚、下位尺度内において項目間の相関が低い項目等（空想：2項目、共感的懸念：3項目、個人的苦悩：1項目、視点取得：1項目）は、今回の分析から排除された。本件研究でのIRIのクロンバックαは0.63から0.83に分布していた。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき、被験者には、本研究の目的、個人情報の保護（被験者個々が特定されない分析方法の使用やデータの厳重な管理・保管等）、調査への自発的参加について、実習指導時に口頭及び書面にて説明を行った。被験者は同意書に署名後、質問紙調査に回答した。

４．研 究 結 果

相談援助実習（教育）が学生の共感性に与える効果：相談援助実習が学生（$N = 32$）の共感性に与える影響を検討するために、反復測定分散分析（Repeated Measure of Analysis of Variance）を実施し、共感性の 4 つの下位尺度（「空想」、「共感的懸念」、「個人的苦悩」、「視点取得」）の時間経過（実習前、実習直後、実習後 1 か月後）による平均値の差異の比較（表 1 参照）及び時間と性別の交互作用についての分析を行った。その結果、「視点取得」において（a）時間と性別の交互作用（$F(2,60) = 3.22, p = 0.47$）が見られ、また、（b）女子学生の実習直前と実習直後及び実習直前と実習終了 1 か月後の平均値に統計学的有意差が見られ（$F(2,48) = 6.15, p = 0.004$）、加えて（c）男子学生の実習直前と実習直後の平均値に統計学的有意差（$F(2,12) = 6.11, p = 0.015$）が認められた。

表 1　共感性下位尺度の時間経過による平均値と標準偏差

共感性		平均値（標準偏差） 実習直前	実習直後	実習終了 1 か月後	総数
空想	男	4.23（1.37）	4.23（0.79）	4.34（0.84）	7
	女	4.60（1.00）	4.70（0.99）	4.94（0.98）	25
共感的懸念	男	5.89（1.06）	5.50（1.08）	5.04（1.06）	7
	女	5.38（0.76）	5.56（0.79）	5.59（0.71）	25
個人的苦悩	男	3.52（1.18）	3.93（0.88）	3.71（0.96）	7
	女	4.60（0.94）	4.60（1.12）	4.39（1.13）	25
視点取得	男	4.52（0.72）[d]	5.21（0.48）[e]	4.60（0.76）	7
	女	4.37（0.78）[a]	4.71（0.96）[b]	4.71（0.91）[c]	25

*以下の文字間で有意差あり。ab 間：$p = 0.005$,　ac 間：$p = 0.044$,　de 間：$p = 0.053$　（Bonferroni 法による）

考察：この調査結果が示しているのは、ソーシャルワーク教育（相談援助実習）が特に女子学生の「視点取得」－他者の視点や見方を取り入れる能力や傾向－を継続的に高めたことを示唆している。ただ、本研究は探索的なものであり、標本数が極めて少ないことが検出力に影響を与えたと考えられる。また、下位尺度内において項目間の相関が低い項目等を排除したことへの妥当性や、米国で開発された共感性尺度をそのまま日本の学生に使用することへの妥当性や社会的望ましさの統制の問題、学生が本来持っている共感性の高さによる天井効果やソーシャルワーク教育の概念化妥当性に関する問題等が結果に影響を及ぼしたと考えられる。

将来的には、（a）　標本数を増やすこと、（b）各質問項目の妥当性を考慮すること、（c）被験者が持つバイアス（肯定的に回答することへの恥じらい等）を考慮した質問項目を検討すること、（d）ソーシャルワーク教育を表す変数としての実習の妥当性等を検討した上で、学生の共感性の変化を分析する必要があると考えられる。

文　献

Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology,* 44, 113-126.

Forrester, D., Kershaw, S., Moss, H., & Hughes, L. (2008). Communication skills in child protection: How do social workers talk to parents? *Child and Family Social Work,* 13, 41-51.

Forrester, D., McCambridge, J., Waissbein, C. & Rollnick, S. (2008). How do child and family social workers talk to parents about child welfare concerns? *Child Abuse Review,* 17, 23-35.

Gerdes, K. E., & Segal, E. A. (2011). Importance of empathy for social work practice: Integrating new science. *Social Work,* 56(2), 142-148.

桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係. 奈良教育大学紀要 (人文・社会), 第37号, 149-153.

佐藤亜樹 (2016). 相談援助実習が学生の共感性 (dispositional empathy) に与える影響について.日本社会福祉学会第48回中国・四国地域ブロック. 32-33.

佐藤亜樹 (2017). 相談援助実習が学生の共感性 (dispositional empathy) に与える影響について. 日本社会福祉学会大65回秋季大会. 287-288.

蕨岡幸一・鎌田次郎・亀島信也 (2007). 対人援助職にとって共感性と攻撃性は必要か. 関西福祉科学大学紀要. 第11号, 297-306.